

ハリウエルの「三匹の子豚」の文化史的読解（その2）

— AT124 話型の英仏類話との関連において —

藤 倉 恵 子

要 旨

（その2）

3. カブラ、リンゴ、バター攪拌器といったハリウエルに見られるモチーフは、ハリウエルの頃にはイギリスから衰退しつつあったハロウィーンの文化に関連するものである。
4. フランス人にとって、カブラは下層階級に典型的な野菜であるだけだが、イギリスでは、農業革命、そして産業革命のもたらす社会変化のシンボルである。
5. 2番目の子豚の家の素材であるハリエニシダは、子豚がどんな世界で生きていこうとしていたかを示している唯一の要素と見なすことができる。ハリエニシダを用いたこのような類いのメタファーは、しばしば、19世紀イギリス文学に見られたものである。ユゴーやディケンズたちのような、子供たちの不遇を描いた19世紀文学のキーワードは、「悲惨さ」であった。そして、それは、また、「三匹の子豚」の物語を理解するためにもあてはまるキーワードである。

キーワード：ハリエニシダ、カブラ、リンゴ、バター攪拌器、悲惨さ

3. モチーフ分析

a. ハリエニシダ

i) シダのある風景と「赤ずきん」

ハリウエルの「三匹の子豚」で、2番目の子豚の家の素材となるハリエニシダ（furze）は他のAT124話型類話には見あたらないが、シダ類（fougère/genêt）が家の素材として登場するので拙論（その1）で取り上げたオーヴェルニュ民話（v.51）に再び注目したい。ハリウエルにおいて、ハリエニシダが物語の展開する空間に象徴的意味を醸し出しているのにたいして、このシダ類は、動物たちが屠殺されると知って逃げ込んだシャンブリエーヴというヒースの茂る荒地という土地柄を指し示すものであった。このように、物語内部において地元を指し示すというモチーフ例は、この話では、オオカミが雌豚を収穫や市に誘う場面にも認められる。すなわち、オオカミは雌豚を家からおびき出そうと、リンゴの貯蔵室のあるソトムッシュ、クルミの地下貯蔵庫のあるシャンブリエーヴへ一緒に行こうと誘い、さらには、ソキスイヤンジュの市で落ち合おうと言うのである。リンゴとクルミは、それぞれの産地名まで出して、地元のオーヴェルニュを指し示す。また、市についても、古道具や油絵の市などの賑わいで、今日でも知られる地名が挙げられている。さらに、物語の結末部では、雌豚はオオカミをあえて家にも

入ってから、猟犬の飼育業で有名なラ・レヌリの地名を告げて、猟犬を連れた猟師たちがそこから押し寄せているとだまし、オオカミを鍋に誘導するのである。

この物語において、オーヴェルニュ地方を指し示すのは、他の話型の伝承話のモチーフにまで及ぶ。

- A Sauxillanges? Justement me fallait m'y rendre. Oui, je dois aller à la foire.

- Eh bien, cette fois, que je t'y voie! Par quel chemin y vas-tu?

- Par le chemin des aiguilles.

- Moi, par le chemin des épingles. On se trouvera là-bas et on retournera ensemble.¹⁾

—ソクスイヤンジュですって？ちょうど、私も行かなきゃならなかったんです。市に行かないとね。

—じゃあ、今度は、おまえさんに会えるな。どの道から行くのかい？

—針の道からです。

—おれは、ピンの道からだ。むこうで落ち合って、帰りも一緒だな。

オオカミと雌豚とのやりとりは、ドラリュが口承版「赤ずきん」(AT333)の多くに認められると指摘した「道の選択」のモチーフ²⁾を思い起こさせる。オオカミは、おばあさんの家に出かける途中の赤ずきんに、「針(aiguilles)の道とピン(épingles)の道」のどちらの道から行くのかとたずねるというものである。オーヴェルニュに位置するル・ヴレー(Le Velay)地方に残る口承版「赤ずきん」から引用しておこう。

- De quel côté passes-tu pour t'en aller?

- Je passe du côté de les épingles, et vous, de quel côté passez-vous?

- Je passe du côté de les aiguilles.

Le loup se mit à courir [...] ³⁾注：引用の原文で、前置詞と定冠詞の縮約はなされていない。

—おまえはどっちを通るのかね？

—ピンの方ですよ。で、あなたはどっちの道を通るのですか？

—おれは針のほうを通ろう。

オオカミは走りだしました〔略〕

かつてはル・ピュイ(Le Puy)と呼ばれたル・ヴレー地方の町について、「赤ずきん」の伝承に関連した調査を詳細に行ったのがベルナデット・ブリクターである。今でもレース産業が盛んでレース美術館もあるこの町には、「道の選択」のモチーフに含まれる「針」や「ピン」をはじめ、レース製造にまつわる換喩表現が多く認められ、しかも、それらが「赤ずきん」の物語の

すみずみまでに関わることを明かにしたのである⁴⁾。ところで、AT124 話型類話では、動物たちの飼い主がたいていは農民であるのにたいして、このオーヴェルニュ民話では、珍しくも、機織り工 (tisserand) である。このことが、物語では直接には言及のない地元のレース産業に関連づけて理解されるだろう。

ハリウエルのハリエニシダへの着眼が、このように、他の文化圏の類話の読解に効果的な視点を提示する例になると言うべきだろうか。いずれにしても、地元を指し示すというモチーフの機能の一連の連鎖が認められることが、口承由来の再話であることを示すものであることも確かであろう⁵⁾。

ii) ハリエニシダとイギリス文学

ハリエニシダは AT124 話型に限らず、伝承文学のモチーフとして例がないことは、『伝承文学のモチーフ』⁶⁾でも確認される。しかし、文学作品を見ると、フランス文学においては、ハリエニシダ (ajonc) の引用の例は、少なくとも、顕著とは言えないが、一方、イギリス文学においては、とくに、ハリウエルの時代、イギリス 19 世紀文学においては、それほど意外なモチーフでもないことに気づく。ハリウエルが「ハリエニシダ」の登場によって指し示そうとしたのは、イギリス文学の伝統であり、かつ、彼の同時代の文学かもしれない。

ところで、ハリウエルの著作目録⁷⁾を参照すると、圧倒的にシェイクスピアに関する出版が多く、手稿に用語辞典 (glossary)、そして伝記など多岐にわたる。彼はシェイクスピアの生誕の地ストラットフォード・アポン・エイヴオンのシェイクスピア博物館の創始者としても知られるシェイクスピア学者なのである⁸⁾。そこで、まずは、シェイクスピアの最後の作品にして、「唯一、ハリエニシダが登場する」⁹⁾『テンペスト』 (*The Tempest*, 1610-1611) を検討することしよう。

かつてのミラノ大公プロスペローが娘と住む孤島のそばを通りかかった船が、プロスペローの魔術によって引き起こされた突然の嵐によって難破寸前となる。その船には、プロスペローを陥れてその地位を奪った弟アントーニオ大公とナポリ王の一行が乗っている。ナポリ王に同行していた老顧問官ゴンザーローは、皆と同様に難破を覚悟し、ひとり、以下のように独白して、第1幕第1場は締めくくられる。

ゴンザーロー「海なら何万エーカーでもくれてやる。代わりに1エーカーの土地が欲しい
— 伸び放題のヒース、ほさほさのハリエニシダ (brown furze)、どんな荒地地
でもいい。神の御心のままに！ だが、どうせなら^{おか}陸で死にたい。」¹⁰⁾

『テンペスト』 第1幕第1場

一行は、陸とは言え、12年越しの復讐を果たそうとする相手の待ち構える孤島に流れ着くこ

とになる。そして、以下に引用のように、プロスペローに仕える妖精エアリエルの魔法によって、囚われの身となるべく、たぐり寄せられるように、ハリエニシダに難儀しながら歩みを進める様には、ゴンザーローの言葉が予言めいて思い出される。ゴンザーローは、「たとえ困難な状況で生きることになっても」という意味で、ハリエニシダの生えた土地を引き合いに出していたからだ。引用の2箇所場面は、ハリエニシダを蝶番にして互いに呼応しあうと言えるだろう。

エアリエル「〔前略〕その耳に魔法をかけたので

母牛の鳴き声につられる仔牛のようについてきました。

のこぎり状のイバラ、鋭いハリエニシダ (sharp furzes) をくぐって

すねを刺され、棘だらけにしながら。」¹¹⁾ 『テンペスト』第4幕第1場

『テンペスト』は、プロスペローや空気の妖精の引き起こす魔力の超自然の世界とともに、難破船から上陸してきた一行のもたらす現実の世界の交錯する作品であるが、次にクリスマス前夜を舞台として、やはり、幻想の世界に社会の現実を織り交ぜ、しかも、ハリエニシダを登場させているハリウエルの時代の作品に注目したい。

イギリスの国民的作家として、今なお人気を誇るチャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』(A Christmas Carol, 1843) は、主人公である吝嗇な老人スクルージが、明日がクリスマスという夜、彼のもとを訪れる幽霊たちに連れられて、彼の過去・現在・未来を見る旅に出るというファンタジーな展開ながら、彼が自分の発した言葉を突きつけられ心を傷める様が描かれる。それが、最も鋭く示されるのは、彼の現在を暴く第2の幽霊との旅であろう。

第2の幽霊によって、スクルージは、まず、彼の書記の家のクリスマスに立ち会うことになり、そこで、その遠くない死が予感される幼い子供に憐憫を感じる。しかし、死にそうな子供が死んで人口が減るのは良いことだと、ヴィクトリア朝初期に広く引用されたマルサス理論が色濃く反映した言葉を、自ら言い放っていたことを幽霊によって呼び覚まされる。それから、幽霊は、もの寂しい、「生えているものと言え、苔やハリエニシダ (furze) にごまごわした草が繁茂するだけ」¹²⁾ の沼地に彼を連れて行く。

引き続いて、スクルージは、彼の甥や姪が彼のことを噂しながら、クリスマスの遊びに興じる場に立ち会い、彼らとともに時間を楽しんでいるような気になってしまう。しかし、この旅の終わりになって、幽霊が衣の襷から彼に取り出して見せた二人の子供の惨めさに、彼が思わず、その子供たちの救済について幽霊に問う。すると、幽霊は、またもや、彼の言った言葉で応じ、彼の無慈悲が彼を破滅に向かわせていることを警告するのである。このように、スクルージと第2の幽霊との旅の構成からして、彼が旅の中盤に見たハリエニシダが、彼の荒涼とした現在の生き方を象徴していることは明かであろう。幽霊が引き合いに出した、スクルージの言

う「救済」とはどのようなものであったかについては、あとで、取り上げることにする。

「非キリスト教徒の大作家」¹³⁾と評されるジョージ・エリオットは、神に代わるべきものとして自らに厳しい道徳律を課すことを、一連の田園小説において描いているが、彼女も、ハリエニシダを作品に効果的に用いている。

彼女の最初の小説となった『アダム・ビード』(*Adam Bede*, 1859)では、主人公アダムの恋したヘティの心象風景として、ハリエニシダが登場する。ヘティは、地主の息子アーサーへの想いを裁ち切り、アダムの愛を受け入れることで心のよりどころを得られるかと思った矢先に、アーサーの子を宿していることに気づく。ヘティは、妊娠を隠したまま、アダムとの結婚式を間近に控えたなか、再び、アーサーへの淡い期待をもち、アーサーに会いに行くが、すでに、アーサーの連隊は国を出ていたことに絶望する。ヘティは、死を覚悟して野をさ迷ったあげくに、ハリエニシダを蝶番に羊小屋のことを思い出す。ハリエニシダは、吹雪の中、羊にとっての避難所になるという。彼女もまた、ハリエニシダをつたってたどり着いた羊小屋を避難所だと感じるのである。

彼女は、羊小屋の近くにハリエニシダ (*furze*) の小屋があるのを思い出した。〔中略〕この小屋のことを考えると、新しい希望の力がわいてきた。〔中略〕彼女は向かい側の門に着き、その横木をたどって羊小屋の横木にたどり着くと、手が棘のあるハリエニシダの壁 (*gorsy wall*) にゆきあたった。なんといい気持ち良さ！彼女は避難所を見つけたのだった。¹⁴⁾

『アダム・ビード』第37章「絶望の旅」

『サイラス・マーナー』(*Silas Marner*, 1861)においては、エリオットは、このような死からの再生というハリエニシダのシンボルとしての意味を、物語構成に活かしている。主人公サイラスは、家の近くの「はびこったハリエニシダの草むら (*furze bush*) に崩れ落ちるように倒れた」¹⁵⁾ まま凍死した女の赤ん坊が何も知らずよちよち歩きの末にたどり着いた彼の家の炉端で眠ってしまった姿に心を打たれ、村人たちに、ひとりでその子を育てることを主張する。この子供の存在が、心を閉ざしていた彼の孤独な人生に変化と希望をもたらすことになる。そして、美しく育った娘エビーが、母親が亡くなったハリエニシダのところに連れていってくれるように父サイラスに頼む日がやってくる。

「おとうさん」と彼女 (=エビー) は、やさしく、重々しい口調で言った。それは、ときどき、彼女が陽気な気持ちのなかにあって、悲しげで、ゆっくりとした声の抑揚で示したものであった。「あのハリエニシダの茂み (*furze bush*)、うちの庭に持って帰りましょう。」¹⁶⁾

『サイラス・マーナー』第16章

娘の名前 <Eppie> は、フランス語の <épi>, そして、<épineux> を連想させる。<épi> は、総状花序¹⁷⁾、すなわち、ハリエニシダの花の形態を指すし、ハリエニシダには棘がある (épineux) からである。サイラスの人生が再生したのは、母をハリエニシダのもとで失った娘エピーを得たことによってであった。娘の母親が亡くなった場所に生えていたのがハリエニシダであったことから、また、娘の名がハリエニシダを想起させることから、この物語においては、ハリエニシダが死と再生という物語のテーマを表現するための作品構成に関わる象徴を担っていると言えるだろう。

ここで、ハリウエルの「三匹の子豚」も、物語半ばで、様相が一変することに気づくだろう。子豚たちが母豚のもとを去ってたどり着いた場合は、すでに見たように、語彙としてはまったく表現されていない。ただ、ハリエニシダの存在だけが、そこが、荒れた風の吹きすさぶ荒野であると示している。これは、子豚たちが困窮のために家を出たと語られるだけに、比喩的にも厳しい生活の状況をイメージさせるのである。しかも、きょうだい 2 匹はすでに命を落とし、一匹残った子豚は家のなかに引きこもってひたすらオオカミの攻撃に耐えている。ところが、物語後半では、子豚は一転して活動的になり、オオカミの策略を軽やかにかわし、作物の収穫も、市での買い物も成し遂げてしまう。そして、ついには、オオカミを退治し、安泰に暮らすに至るのである。「三匹の子豚」においても、登場するハリエニシダの存在が、死と再生を表す作品構成のシンボルの役割を果たしていると思えることができるのではないだろうか。

b. カブラ

i) 文学のなかのカブラと食文化のなかのカブラ

ハリウエルの「三匹の子豚」に、オオカミが子豚を収穫に誘う作物として登場するカブラ (turnip) は、他の類話にまったく認められないわけではない。しかし、『伝承文学のモチーフ』¹⁸⁾ を参照すれば、伝承話のモチーフとしては、「累積昔話」において「カブラを引っこ抜く」<Z49.9.> として、また、「カブラの乗り物」<F861.4.1.> としての用法しか挙げられていない。前者のモチーフを含む AT2044 話型の話として『民話の話型』で紹介されているのは、ネズミが猫を、猫がメリーをひっぱる、という具合に、ひっぱる動作の連鎖の末に、ついにカブラが引っこ抜かれるというものである。一方、後者のモチーフを含むとして挙げられているのは AT402 話型である。これは、グリム童話「3 枚の鳥の羽」(KHM63) を例に挙げうるだろう。男が「中をくり抜いた黄色のカブラ」(eine ausgehöhlte gelbe Rübe)¹⁹⁾ にヒキガエルを入れると美しい御姫様に、そして、カブラは馬車に変身するというものである。ところで、グリム童話の「カブラ」<Rübe> は、フランス語では <navet> や <rave> で、英語ではハリウエル版での <turnip> にあたる。ただし、原産国がスウェーデンであるところから、英語では <swede>, カブラを指すスウェーデン語を語源として英仏語で「ルタバガ」<rutabaga> と呼ぶ品種もあり、これは、キャベツ <Kohl/chou> とカブラ <Rübe/navet> の合成語となって、フランス語で <chou-navet>、

ドイツ語で <Kohlrübe> と呼ばれる。実際、カブラは植物上の分類では、「《ブラッシカ》<Brassica>、すなわちキャベツの変種」²⁰⁾なのである。しかし、ルタバガのほうが、<turnip/navet> より大きく、肉質が黄色なので、このグリム童話には、「ルタバガ」のほうがふさわしいと思われるが、再話にあたって、厳密に野菜の呼称に留意しなかったのかもしれない。ただ、ハリウエルがカブラに <turnip> の語を選んだのも、彼の時代に最も一般的なカブラの呼称であった（となった）可能性をさぐるべきだろう。また AT2044 話型の類話の分布は、『民話の話型』によると、さすがに、カブラの原産国として挙げられているスウェーデンでの類話数もとても多い（11 話）が、先にシダのモチーフに関連して検討したことと照らし合わせて、物語にカブラの登場することが、その土地の産物として特筆すべき作物であることに関係しているのか検討してみよう。

フランス語圏類話 51 類話中、オオカミが動物を収穫に誘う物語要素を含むものは 13 話²¹⁾あり、そのうち収穫物を確認できた 10 話のうち、カブラ (rave) が収穫物であるのは、1 話 (v.7)²²⁾にとどまる。ドラリュは、そもそも、AT124 話型の物語要素分析において、収穫物の具体的な種類を、まして、カブラをモチーフ（物語要素）とは見なしていない。その一方で、ドラリュは、ニヴェルネ民話 (v.10) について「ハチミツ」、アンゲーモワ民話 (v.34) については「リングとブドウ」と、あえて、収穫物の内容を付記している。これは、ニヴェルネ地方にあるモルヴァンが養蜂の盛んなハチミツの産地であり、アンゲーモワ地方は、ブランデーで有名なコニャックの地を擁することから、各地の名産が口承話に溶け込んでいることを示唆したものであろう。同時に、ハリウエルに登場するカブラを念頭において、「地元こんなに美味なるものがあるのに、あえて、カブラを収穫しようと誘うだろうか」と言わんばかりに思われる。ブルゴーニュ民話 (v.7) にカブラが登場したことについても、名物のブルゴーニュ風牛肉のワイン煮 (bœuf bourguignon) に、キツネ色になるまで炒め、あるいはバター漬け (confit) にしたカブラがつきものであるからと説明できそうである。いずれにしても、ハリウエルの再話から 1 世紀以上がたっても、フランス語圏類話における収穫のモチーフに登場するのは、メイン料理のつけあわせのカブラよりも、フランス各地の豊かな食文化が反映したものとなっているとは言えそうである。

一方、英語圏類話で、ハリウエル以外でカブラが唯一登場するピクシー版については、地元の産物としての関連づけどころか、キツネが妖精を収穫に誘うことじたいが意味があるのか疑問であろう。食べ物の好みなど妖精には関係づけられない。また、この物語の舞台であるダートモアのようにヒースの茂る原野に農作物の畑があるなどとは思えないだろう。しかし、一方では、それほど、カブラの収穫が、イギリスにとって意味があるからこそその登場であるとも考えられる。美味とは言えないはずのカブラが、広くヨーロッパの食文化の歴史において、どのような象徴的存在であったのかを見ておこう。

イギリスと言うより、厳密にはスコットランド郷土料理のカブラ料理と言えば、ハギス

(haggis)であろう。添え物ながら、カブラ (turnip) がかならずレシピに入る。羊の肉のミンチに、細かく切った穀類、タマネギなどの野菜を羊の胃袋に詰め、何時間もゆでて、ジャガイモとカブラのピューレを添えるものである。フランスにも、ハギス同様、羊の煮込み料理で、カブラが欠かせないナヴァラン (navarin) がある。この料理名は、カブラ (navet) の語の変形だとする説²³⁾もあるぐらいである。

ところで、2005年、当時のフランス大統領が国際政治の場で、イギリスに対する農業政策の批判の矛先をイギリス料理のまずさに向けて、物議をかもしたことがある²⁴⁾。そして、その際、ハギスを暗にけなしたことも取りあげられた。この騒動の根底には、ある種の食べ物についての偏見の歴史がかい間見えるように思われる。この視点から、イギリスとフランスの庶民の煮込み料理、ハギスとナヴァランのいずれのレシピにも欠かせないカブラが注目される。

ヨーロッパにおいて、カブラが、庶民の、しいて言えば、下層民の象徴であったことを、ブリュノ・ロリウーは中世ヨーロッパ食生活史²⁵⁾を論じたなかで取りあげている。15世紀初頭のイタリアのシエナの作家、ジェンティーレ・セルミーニの『レ・ノヴェツレ (物語集)』²⁶⁾には、裕福な家の若者たちが田舎出の若者に身の程を思い知らせようとして、その食習慣を槍玉にあげる話 (第25話) が含まれている。食事の時に飲むのが、「生水か、カブラかニンニクなまみずの匂いのする水」²⁷⁾と述べられているのは、飲み水に口臭の匂いが移るまでに、ニンニクとカブラを大いに食べる習慣を指していることになるだろう。さらに、田舎者たちの宴会の大鍋料理と言え、「カブラと水牛の肉塊に羊の頭が何個かぶち込まれた」煮込み料理であったと語られる。これはナヴァランをさしているのかもしれない。

とくに、フランスにおけるカブラの評価は、17世紀になっても芳しくなく、フルティエールの辞典²⁸⁾での「カブラ」(rave)の項には、「味の引き立たない料理」を意味する「もはやカブラの味しかない」(il n'a non plus de goût qu'une rave)との慣用表現が記載されている。このように侮蔑の対象であった「カブラ」だが、少なくとも、18世紀末には、まだ比喩的に用いられてはいなかった。「彼の栄光は過ぎ去り、カブラ (les navets) は残ることだろう」²⁹⁾とリヴァロルが自らの諷刺詩「キャベツとカブラ」("Le Chou et le Navet")で述べた時、「カブラ」は自作の詩を指すものでしかなかった。彼は、ドリールの『庭園、風景美化法』(1782)を攻撃して、この詩を書いたのだった。しかし、19世紀(1853)以降、「カブラ」(navet)は「その味のまずさから」、「芸術作品の駄作」³⁰⁾を意味するフランス語の比喩語となり、現代の俗語・隠語辞典³¹⁾にも記載されている。

このような歴史をもつカブラであるがゆえに、フランス語圏類話において、収穫に誘うモチーフには好まれなかったとしても納得されるだろう。しかし、カブラが格別に美味しい食べ物ではないとして扱われてきた歴史の認識は、ハリウエルにもあったはずではないだろうか。しかも、カブラは、昔話には珍しい野菜なのである。ハリウエルは、そのような食の評価ではない面で、カブラをモチーフとして選択したのではないだろうか。

ii) ハロウィーンとバター攪拌器

ハリウエルの物語で、オオカミが子豚を誘う市とは、リンゴの収穫の時期でもあり、秋の収穫祭のようなものであろう。ヨーロッパで、秋の収穫祭はしばしば、キリスト教の祝祭の由来であった。カトリックの祝日である11月1日の「万聖節」(All Saints' Day)も、古代ケルト民族が、かつて、秋から冬の移行の時期にあたるが、「11月1日に最も近い満月の日に祝われていた」³²⁾「サウィン」と呼ばれた祭りに由来する。しかし、16世紀になる頃には、万聖節の前夜は、万聖節とは切り離して祝うようになり、イギリス諸島全域の民間伝承のなかに浸透し始めた。この頃から、この前夜祭を「ハロウィーン」と呼ぶようになったようだ。16世紀に入る前には「聖なる名士」「聖人」として <saint> でなく <hallow> の語を用いていたので、「万聖節」を <All Hallows>、前夜祭を <All Hallows Even> の省略形で呼ぶようになったものである。

ハロウィーンが引き継いでいる、かつてのサウィンの祭の要素を指し示しているのが、子豚が市で買ったバター攪拌器 (butter-churn) ^{画像1)} ではないだろうか。「サウィン」は、ケルトの語源上は「夏の終わり」³³⁾ を意味した。これは、農作物の収穫だけでなく、「家畜の群れを小屋に戻す時期」³⁴⁾ にあたっていた。乳の出なくなった乳牛は、食肉用に売却するかたちで家畜を整理することになったし、また、保存食としてバターやチーズを作ったのである。つまり、バター攪拌器 (攪乳器) は、ハロウィーンの祭の季節をあらわし、その頃に行われた農家の作業を指し示すものなのである。そして、バター攪拌器をはじめ、サウィンの祭あるいはハロウィーンの要素を指し示すのは、ハリウエルをはじめ、英語圏類話のみの特徴に思われる。

フランス語圏類話で、動物を市に誘う物語要素を含むものは14話³⁵⁾ あるが、市での買い物に攪乳器は見当たらない。その大半が、桶、鍋、壺など、収穫の作物を入れるような容器で、ハリウエルでは、オオカミから身を隠して帰宅するために、買い求めた樽状の攪乳器の中に入って回転して帰宅するのにたいして、器の中に身を隠してひたすら静止して相手が立ち去るのを待つ。その間、オオカミに放尿されようが (<III.D.2.>)、動物が器の中から出ることはない (v.9,23,29,31,33,34)。一方、英語圏類話では、市に誘う物語要素は、黒人伝承 (リップンコット版) 以外に見られる。ラング版では、子豚が自ら「近くの町」に出かけ、ヤカン (kettle) を買い求める。ヤカンでも、やはり、中に入って転がって帰宅するところは、ハリウエルの影響を思わせる。ピクシーが大きな市で買ったものは、時計 (clock)、壺 (crock) そしてフライパン (frying pan) である。調理器具から日用雑貨までというのが、サウィンの祭や、ハロウィーンの祭での立ち並ぶ露店の品揃えを感じさせる。特に、クンダル版では、この攪乳器の「新品」を買い求めると言及があるのが注目される。必要な時期にあたっての購入ということで、保存食をつくる時期を感じさせるからだ。さらには、クンダル版では、ガチョウは市に出かけるのに、羽繕いをし、赤の嘴をきれいにし、つまりオシャレをして出かけるし、出かけた市では、踊るクマ、背の高いキリン、美しいコンゴウインコなど、目にするものを堪能するのである。これは、サウィン、そしてハロウィーンの祭において、人々が各地から集まる雰囲気そのものが

描かれているのだと解釈できるだろう。

このように英語圏類話には、大英帝国におけるハロウィーンの祝祭の名残が反映しているものの、これらが再話された19世紀が終わる頃には、祭は子供あるいは貧しい大人たちに限ったものであったという³⁶⁾。そこで、ハリウエルは、彼が再話した頃(1842)には、すでに、危機に瀕しつつあった、古きイギリスの祭の光景、サウインの祭の名残りを童話に書き留めておこうとしたのかもしれない。しかし、同時に、ハリウエルは、消えつつあるかつてのイギリスの風物詩だけでなく、彼の時代に脚光を浴びていたリゾート地を描きこんでいる。ハリウエルで登場する唯一の実在の地名、市の開催地であるシャンクリン(Shanklin)である。

実は、シャンクリン^{画像2)}の町の位置は、ピクシー版で、市が「少し離れたところ」で開かれていると説明されているのが合っていないわけではない。ピクシーの物語の舞台であるブリテン島の南西部海岸沿いの地ダートモア^{画像3)}から、ブリテン島の南部海岸線の長さの半分だけ東に移動した地点にあるワイト島の南南東に位置するからだ。

シャンクリンの町の公式ホームページ³⁷⁾で語られる町の歴史によれば、18世紀後半までは、「辺鄙で活気のない漁師町」であったが、ほぼ、ハリウエル(1820-1889)の時代に重なるヴィクトリア女王時代(1837-1901)の始まりとともに、鉱泉を楽しめる景勝地として人気が高まった。1819年にイギリスの詩人キーツが訪れ、この地に詩作のインスピレーションを得ている³⁸⁾、また、チャールズ・ディケンズが1864年から1865年にかけて書いた最後の小説『我らが共通友人』のシーンのひとつが、シャンクリンの有名な砂浜をとらえている³⁹⁾。つまり、ハリウエルの時代のシャンクリンは、イギリスをはじめヨーロッパでも最先端の町だった。オオカミが子豚をおびき出すには、きわめて魅力的な町であったことが、ハリウエルの時代の人にも納得されたことだろう。また、この島で、海に面した小高い丘は放牧地であった。シャンクリンの市に出かけた子豚が購入したのが、「バター攪拌器」(butter-churn)というもの、うなずけるだろう。

iii) ハロウィーンとカブラ

ハリウエルに収穫の作物として登場するカブラと言え、ハロウィーンでのカブラのランタンにまつわる「ジャック・オ・ランタン」の伝承に登場する野菜として、ハロウィーンと結びつく要素と言えるかもしれない。しかし、ジャックの伝承とハリウエルの物語、それぞれの物語を構成するカブラの役割は、どんなものだろうか。まずは、カブラのランタンの風習の由来から確認しておきたい。

カブラのランタンの由来を語るには、カボチャのランタンにも触れなければならない。カボチャのランタンの由来は、1845年のアイルランドにおける「胴枯れ病」⁴⁰⁾にまで遡る。その結果、引きおこされた大飢饉によって、アメリカに移住したアイルランド人たちが、アメリカで中流階層を形成するようになったなかから、自分たちのアイデンティティーを思い起こすべく、

母国でのハロウィーンのカブラのランタンの風習を復活しようとする試みがなされるようになったと言われる。

しかし、ハロウィーンの文化史研究の第一人者として知られるリサ・モートンによれば、アメリカでは、ハロウィーンの間習がヨーロッパからアメリカに持ち込まれる何十年も前から、新大陸原産のカボチャに薄気味の悪い笑い顔が彫られていたものであり、中に蝋燭をとめて童話を読んで楽しんでたという⁴¹⁾。しかし、このアメリカの伝統を思い起こさせることに貢献したのは、なによりも、ワシントン・アーヴィングが発表した短篇小説「スリーピー・ホローの伝説」(1820)であるという⁴²⁾。首無しの騎士が、いつも、火焰となって姿を消すことや、彼に首を投げつけられ、そのまま失踪した人の持ち物と一緒につぶれたカボチャが転がっていたという物語展開が連想させたのだろう。一方、旧大陸におけるカブラのランタンの風習は、サウインの祭に、火を焚く火祭りの側面であったことに由来する。この習慣は19世紀末になると、イギリスでも一般には消滅したのだが⁴³⁾、アメリカから伝わったカボチャのランタンの風習がこれに取って代わった際に、ヨーロッパできわめてどこにでもあるカブラがランタンになったものである。

かくして、以上のような新旧両大陸の伝承の要素が混じり合って、モートンによれば、1880年代の後半⁴⁴⁾には、ハロウィーンと関連づけてのランタンを「ジャック・オ・ランタン」(Jack O' Lantern)と呼んで飾り付けることが行われるようになったのであり、同時に、これにまつわる伝承をも指す言葉になったのである。

しかし、一般に知られるカブラのランタンの由来は、「ジャック・オ・ランタン」の最後に語られるものだ。生前の悪行のために天国にも、地獄にも入れてもらえないジャックに、悪魔は地獄の熾火を用意し、それをカブラをくり抜いた中に入れて持たせてやるというものである。では、なぜ、カブラのランタンなのかと言えば、ウィティン版⁴⁵⁾では、ジャックが、好物のカブラを盗み、カブラ畑を踏み荒らしていたこと、ドゥーゼ版⁴⁶⁾では、ジャックが、彼の魂を奪うべく死に神に雇われた男たちを殺してカブラ畑に埋めたことが因縁づけられている。

このように、「ジャック・オ・ランタン」は、たしかに、カブラと密接に関連づけられた物語だが、『伝承文学のモチーフ』ですでに検討した「カブラ」のモチーフ分類には該当しない。この伝承の話型を構成するモチーフはカブラではなく、モチーフ番号<A2817.>に「ウィルオウイスプ (will-o'-the-wisp) あるいはジャック・オ・ランタン (jack-o'-lantern) の由来 (origin)」⁴⁷⁾として挙げられているもので、いわば、物語のプロットそのものがモチーフといってよいだろう。そして、このモチーフに該当する AT330 話型がカブラのランタンの伝承の話型ということになる。そして、この類話は、『民話の話型』によれば、かならずしも、ハロウィーンの前身となるサウインの祭の地元であるイギリスだけでなく、ヨーロッパ全体に分布している。そこで、モートンが、「ジャック・オ・ランタン」を成立させた要素として、「鍛冶屋のジャックの伝説」⁴⁸⁾を挙げているのも、この話型を指すものと理解されるだろう。実際、『民話の話型』で、

AT330 話型の代表的物語名として挙げられているのは「あのスミスさんとやら悪魔の裏をかく」("The Smith outwits the Devil") なのだが、普通名詞の <smith> は、中世英語では、「鍛冶屋」を意味したし、また、この話型の類話として挙げられるグリム童話が「鍛冶屋と悪魔」(KHM82) であること、『フランスの民話』に収集されたフランス語圏 AT330 類話での主人公の職業が鍛冶屋のものが 100 類話中 24 話と最も多いことから納得させられるだろう。

『民話の話型』によれば、AT330 話型は、悪魔との契約、魔法の品を授与されること、悪魔をだますこと、地獄と天国からの追放、の 4 つの要素から成るが、このうち最も重要なのは、物語タイトルに含まれる「裏をかく」の要素、つまり、いかに主人公が悪魔をだましたかであり、この要素のバリエーションが類話をつくっていると言える。つまり、カブラのランタンの由来にあたる部分は、最後に「追放」が決定してからの後日談のようなものであり、まして、そこに登場するカブラは些末なディテールにすぎない。

にもかかわらず、むしろ、いかにジャックが悪魔をだましたかは、プロットから抜け落ちて語られることが多いように思われる。ウィテイング版によれば、ジャックが悪魔の裏をかくのは、ジャックの悪行ゆえ、悪魔がその魂を奪いに來たと連れだつて出発して地獄に向かう途中でのことである。ジャックがお腹がすいたからと、リンゴの木からリンゴをとってきてくれるように悪魔に頼む。これを、彼の最後の頼みとして聞き入れた悪魔が木にのぼって収穫を終えた頃には、ジャックは、リンゴの木の根元を木の十字架で取り巻いてしまっていたため、悪魔は三日三晩、降りられず、ついに、もう魂を奪いに來ないとジャックに約束させられてしまう。これが、死んだジャックが地獄にも行けない言質となるわけである。

このようなジャックの「だまし」に注目すると、だますほうの立ち位置が木の上か下かの違いがあるが、「ジャック・オ・ランタン」におけるのと同じく、収穫にまつわるだましの構図が、AT124 話型における収穫の場面で見い出されることに気づく。ただし、ハリウエルでは、約束の時間より早く出かけるのと同じ類いの、いわば、防御として逃げるためのだましである。先にリンゴの収穫を始めて、木から降りようとしていた子豚は、オオカミがやってくるのを見ると、一つ投げてあげようと言って、うんと遠くに投げてオオカミがそれを拾っているうちに逃げ出す。一方、フランス語圏類話でも、収穫のモチーフのある 13 類話（註²¹ 参照）のうち 6 話に認められるが、あらかじめ用意していた石 (<III.B (3) 1>:v.5,6,10) や灰 (<III.B (3) 2>:v.4,9) の入った袋を木の上からオオカミにぶちまけるにとどまらず、収穫したリンゴのいっぱい入った盥ごと投げつけ、オオカミの口を裂く (<III.B (3) 3>:v.26) など、攻撃的要素の強いだましとなっている。

このように見てくると、ハリウエルは、ハロウィーンの伝承の属する話型の要素とは、かすかに関連づけられているが、伝承におけるカブラの登場と結び付くとは言えないだろう。それでも、ハリウエルの物語でのカブラは、やはり、ハロウィーンの要素で関連づけられているのである。英語圏でもっとも一般的名字ではあるが、一方では、鍛冶屋を意味する「スミス」の

名は、子豚が「カブラ」の収穫にでかけた先の畑の名前、すなわち、「スミスさんの家庭農園」(Mr. Smith's Home-field)」となっているからである。

iv) ハロウィーンとリンゴ

ハリウエルの物語において、季節を明確に指し示す役割をしている収穫のモチーフであるリンゴだが、イギリスの文化的源流であるケルト伝承と深いつながりがある点からも考察されるべきだろう。ケルト伝承で、リンゴの木の生えている西方にある至福の楽園の島は「アヴァロン」と呼ばれるが、その語源は、ウェールズ語とブルトン語で、リンゴを意味する「アヴァル」(aval)の派生語である⁴⁹⁾。また、イギリスの伝承童謡（マザーグース）にもリンゴはよく登場し、「日に一個のリンゴで医者いらず」(An apple a day, Sends the doctor away)と格言のようになってしまったものもある。ハリウエルも、『イングランドの伝承童謡』にリンゴがテーマの唄を収めている。

A was un apple-pie;

B bit it

C cut it;

[...]

X, Y, Z, and amperse-and,

All wish'd for a piece in hand.⁵⁰⁾

A は、「アップルパイ」の A

B は、それを「がぶりとかぶりついた」の B

C は、それを「切り分けた」の C

[中略]

X と Y と Z と、それと

その一切れを手にするために願ったことすべて

多くの伝承童謡がそうであるように無題だが、いわば、「アルファベットの唄」と言うべきもので、すべてのアルファベットが、リンゴの一切れを手にするために必要な動詞の頭文字で順に並べられている。リンゴはイギリスの伝承の世界で、特権的果物なのである。

リンゴは、ハロウィーンの頃が収穫期にあたることもあり、ふんだんに食べ、さらには、占いに使ったということだ。そもそも、占いがハロウィーンの祝祭の一部になっていたのであり、「螢の光」(“Auld Lang Syne”)の作詩者として知られるスコットランドの国民的詩人であるロバート・バーンズ (1759-96) は、詩の中にハロウィーンの占いの習わしの神髄を詠み込んだ詩を残しているという⁵¹⁾。

すなわち、ハリウエルの「三匹の子豚」で、収穫の果物として登場するものといえば、イギリスの伝承童謡、ハロウィーンの文化、しいてはイギリス文化の源流であるケルト文化の影響からも、リンゴ以外、考えられないだろう。

フランス語圏類話において、収穫のモチーフで登場する作物については、地元の産物としてとらえる視点を試みたが、ハリウエルにおいては、以上のように、攪乳器、カブラ、リンゴとあわせて考えれば、イギリス文化に関連したハロウィーンや、ケルト伝承などとの関連で登場したものと理解すべきだろう。

ところで、ハリウエルが含み持っていた「ジャック・オ・ランタン」のルーツである AT330 話型でのだましの要素は、ハリウエル以外、英語圏類話には認められなかった。そもそも、収穫のモチーフそのものが、ハリウエルとピクシー版にしかないものであった。一方、フランス語圏類話には、ハリウエルも含めて、英語圏には認められない、食に関するモチーフがあることに触れておかなければならない。それは、物語冒頭、主人公の動物たちは、屠殺を逃れて逃走するという物語要素 <LB.1.> で、フランス語圏類話のほぼ半数、24 話⁵²⁾ に認められる。屠殺と言っても、つまりは祝祭のご馳走を意味することになる。このことは、ハリウエルが収穫の要素を再話に取り込んでも、描くことのなかった面である。この点を検討することになるだろう。

4. 農業革命と産業革命

a. カブラとイギリス農業革命

「カブラ」を指す英語 <turnip> がフランス語に入ってきたのが、18 世紀半ば (1758) である⁵³⁾ ことは注目されているだろう。これが、イギリスにおける農法が大きく変わった頃であったからだ。ビル・プライスが『歴史の方向を変えた 50 の食べ物』⁵⁴⁾ において、カブラ (turnip) をイギリスにおける農業革命と強く結びつけた野菜として挙げていることを参照したい。

イギリスにおける農業の変化の発端は 14 世紀のことで、当時、富を蓄積し発展をとげていたオランダを中心とする低地帯諸国の諸都市へ、ヨーロッパ各地から農民が押し寄せたにもかかわらず、農業に適した土地は限られていたことにある。土地の生産性を倍増させるべく、新たな農法に取り組んだのである。かくして、それまでのフランク王国以来の 3 輪作 (three-field crop rotation) のシステム⁵⁵⁾、すなわち、土地を 3 区画にわけて、ひとつは秋播き作物の畑、ひとつは春播き作物の畑、そしてもうひとつを休耕地 (休耕地) としていたのにたいして、牧畜と農地耕作を合体させた 4 輪作 (four-field rotation)⁵⁶⁾ の革新的システムが導入されたのである。休耕地にあてていた農地区画に、穀類作物とはまた別の悪疫や病気の領域に従属している家畜の飼料となる草やクローバーなどを生育させることで、飼料の不足する冬季に家畜を飼うことを可能にしたのである。なかでも、オランダはお金をかけて埋め立てをする一方で、カブ

ラ (turnip) を休閑地に栽培した。これは、冬期には安価な食物とはなっていたとは言え、本来、食用作物として育てられてこなかった根菜で、動物のうちでも、とりわけ、羊の飼料となっていたものだ。すでに見てきたとおり、カブラの地位が食文化史的に低いのもうなずけるだろう。

このように、人類の農業の発展を「輪作」という視点からとらえるならば、3輪作以前の「古代2輪作システム」と言うべき「2圃式農業」⁵⁷⁾、すなわち、秋に播いて翌夏に収穫する耕作と、地力回復のための全土地区画の休耕とを、交互に繰り返す方式に至るルーツを、旧約聖書「レビ記」(25:1-4)において、神が土地を休ませることを説いたのに求めうるかもしれない。6年の耕作のあと、7年目には、全き安息を土地に与えなければならないというものであった。

かくして、あらたな特別な輪作のシステムの導入は、以降、500年以上に及ぶ農業の基本を形成するものになり、今日でも、多くの農法に残っているものになったのである。しかし、この農法が成功するには、オランダが大規模な土地の埋め立てを行ったように、大規模農法が必要であった。ところが、イギリスでは、有力な地主や村の所有する広大な土地の細分化された1区画を、個人や農民家族が借り受けて耕作し、家畜に休閑地で草を食べさせる権利を持っているという「開放耕地制」(open field system)⁵⁸⁾がとられていたのである。このために、18世紀から19世紀にかけて、議会の承認のもと、開放耕地の「囲い込み」(enclosure)が行われたのである。この時代に囲い込みが社会に与えた衝撃は、ロビンソン・クルーソーが孤島で行った柵囲いが本国での当時の囲い込みにならったものであるとの見方を歴史学者に提示させるほどであった⁵⁹⁾。

新たな輪作農法とこれが引き起こした囲い込みに加え、新しい機械設備の発展、家畜飼育法の改良が伴って、18世紀のイギリス農業革命が成立することになったのである。そして、このイギリス農業革命を担った啓蒙的人物のひとりが、チャールズ・タウンゼント子爵(1674-1738)である。彼は、政治家を引退後、相続したノーフォークの広大な土地で、オランダでの複雑な7段階にわたる輪作を単純化した「ノーフォーク4輪作農法」(the Norfolk four-course rotation)⁶⁰⁾をイギリスに広めた。そして、この農法は、とりわけ、休閑地に、クローバーや豆類とともに、カブラ(turnip)を植えることを推進するものであった。当時のイギリスの代表的詩人アレグザンダー・ポープは、諷刺詩に多くの著名人を引用しているが、タウンゼントについては、当時の彼のあだ名で、「カブラのタウンゼント」と表現しているほどである⁶¹⁾。それほど、イギリスにおいて、カブラはイギリス農業革命の、そして、ひとつの時代の象徴でもあったのだ。

ここで、ハリウエルの物語のカブラ畑に戻ってみたい。オオカミが子豚をカブラの収穫に誘った先は、「スミスさんの自家農園」(Mr. Smith's Home-field)である。そして、次にオオカミが誘った先のリンゴの「メリー園」(Merry-garden)については、所有者が明確に示されていない。<Merry>は、人の名前かもしれないが、形容詞の<merry>かもしれないと思わせるのは、

アポストロフィーを使用せず、あえて、ハイフオンによる表記であるからだ。実際、翻訳を参照しても、ハリウェル（ジェイコブズ）の和訳の「メリー農場」⁶²⁾や、原作に忠実な絵本で知られるガルドン⁶³⁾の和訳の「メリーさんのくだものばたけ」のように、リンゴ園の所有者名が <Merry> さんだとしたのにたいして、ガルドンの仏訳では、<merry> を「陽気」の意味の形容詞と解釈し、いわば、「陽気園」の意味のリンゴ園となるように <le Gai Verger> と仏訳している。

もし、スミスさんの個人農園がイギリスにおけるひとつの農業形態、そして、農業従事者のひとつの階層を指したものとすると、その行く末を暗示するための対比的な比喩的名称としてリンゴ園のほうを、「アヴァロン」を連想させる「陽気園」と名づけたのではないだろうか。つまり、スミスさんの畑のように個人が農作する自家農園（Home-field）は、イギリス農業革命の要であるところの新たな輪作農法の効率を上げるのには向いておらず、現実には、「かつて人口の3分の2を占めていた50エーカー以下の小土地所有者は、1760年代から70年代にかけて社会集団として事実上消滅し」⁶⁴⁾、土地を離れ雇用先を求めて移動する農業労働者か、農業革命に遅れて始まった産業革命がもたらした新しい産業形態である工場制の労働者（とくに機械編み工）か、あるいは、救済を受ける貧困者となったのである。このような個人農園者の状況を農業革命と結び付けて、ハリウェルの描く「スミスさんの自家農園」は、農業革命のシンボルであるカブラ畑なのであり、物語での収穫のモチーフはカブラであるべきだったのだと理解されるだろう。そして、ハリウェルの物語冒頭で、子豚たちが貧困のために親と住んだ土地を離れるのも、上に述べたような、18世紀に始まったイギリス農業革命、あるいは、1760年代に始まった産業革命の生み出した社会状況をあらわしているのではないだろうか。しかも、ハリウェルの時代である19世紀、イギリスの子供たちは、7才から働くことができたし、家が貧しければ、6才を過ぎると働きに出る運命にあったという⁶⁵⁾。産業革命の象徴たる紡績工場には、寄宿舎もあり、親元を離れた子供たちがいたのである。まさに、ハリウェルの描いた「三匹の子豚」の物語の冒頭通り、子供たちは、困窮のために、家を出ていったのである。

b. 農村共同体の崩壊：イギリス食文化の衰退

イギリス農業革命は、食糧の増産を可能にし、イギリスの人口を増やしたが、それまでの農村の姿を変えてしまった。仕事のために村を離れることは、いわゆる職住分離が進むことであり、農村共同体の地縁が消滅することであり、地縁が支えていた祝祭の要素である音楽や舞踏とともに、とりわけ、日頃にはないご馳走を料理し、そして、皆がそろって食べる機会も失われたのである。ここで、先にとりあげたが、イギリスに対する農業政策への批判が食文化に向かって波紋を呼んだという話題が思い起こされるのである。実際、小野塚知二氏は、イギリスにおける農業革命をイギリスの食文化の衰退に結び付けている⁶⁶⁾。新たな農法を可能にするための囲い込みによって、村の共有地が失われたことも、そこで、日々の薪を求め、高級食材で

あったキノコ類や、そこに生息する野生鳥獣を捕獲することで生計をたてていた人々の生活を奪うと同時に、いわゆる在り地食材の多様性を失わせたことで、それにふさわしい多くの料理法が失われることにもつながったのである。

食材が料理法を豊かにすることは、美食家によって指摘されてきたことである。飼育によらない、村の共同地が供給源となってきたような鳥獣は、本来、「獲物」を意味するフランス語で「ジビエ」と呼ばれた。フランスのブリア＝サヴァランは、法律家、政治家ながら、食通の書として有名な『美味礼賛』（1825）を残しているが、そのなかで、このジビエについて項目をもうけている⁶⁷⁾。「食卓の花形」と述べたうえで、これらが美味なのは、必ずしも、食材固有のものではなく、むしろ料理人の腕前によるのだと言う。牛肉なら、鍋に、その一塊と塩と水を放り込んでおけば、ブイ（ゆで肉）とポタージュがわけなくできるが、ジビエについては、同じようにしては、とても食べられたものではないのであり、造詣の深い料理長によってこそ、滋味ゆたかなご馳走になると述べている。このことに関連して、ハリウエルで注目したいのは、子豚が料理を行ったことである。

[...] so the little pig [...] boiled him up, and ate him for supper, and lived happy over afterwards.⁶⁸⁾

そこで子豚は〔中略〕オオカミをゆでると、晩ご飯に食べてしまいました。それからは、ずっと幸せに暮らしました。

退治したオオカミなりキツネを食べた、しかも、「ゆでて食べた」などというのは、動物昔話に見当たらないだろう。動物昔話で、弱肉強食の自然の摂理として、一方が他方をむさぼり食うことは感情移入させないし、味などの食文化の要素も喚起させない。一方、ハリウエルでは、「ゆでる」という料理の基本的手順が、なまじ語られているだけに、それだけの手間で作られたオオカミの味のまずさすら想像させるのである。ここに、ハリウエルの時代の食文化に関する無関心さが透けて見えると言っては、言い過ぎだろうか。一方、ハリウエルより150年も前、17世紀末、フランスのペローが再話した「眠れる森の美女」（AT410）では、王子の人食い鬼である母親は、王子の不在の間に、その子供たちを食べるにあたり、「ロベール・ソースで」⁶⁹⁾食べたいと、料理長に注文するのである。このように見てくると、ハリウエルが「三匹の子豚」に登場させたカブラは、イギリス農業革命のシンボルであるだけでなく、この革命が引き起こした社会的状況に加え、文化的事象として、イギリスの食文化の衰退をもたらしたことの象徴にも見なしうるだろう。

農業革命はヨーロッパのどの国でも行われたが、イギリスにおけるように、食文化の衰退を招くほどの急速な農村共同体破壊はなかったとされる。このことは、すでに触れたように、フランス語圏類話には、動物たちが屠殺されると知って逃げだす話が類話の半数を占め、しかも

そのうち大半が20世紀も半ばの再話であるのにたいして、英語圏類話は、すべて19世紀の英語圏類話を対象としながら、屠殺の話がひとつも認められないことにも示されているのではないだろうか。

屠殺の光景は、ドイツの農村においても、19世紀には、子供たちがまだまだ目にする光景であったことを示すのが、グリム童話「こどもたちが屠殺ごっこをした話」(KHM22a/AT2401)である。子供たちが、屠殺係(肉屋)、料理番、料理番のしたごしらえ、そして豚の役割を決めて遊ぼうとして、実際に豚役の子どもの喉を掻き切ってしまう話である。残酷な内容のために、童話集からは初版(1812)以降、削除されたものである。しかし、グリム童話集が第7版まで版を重ねた時代(1812-1857)と重なるドイツのビーダーマイヤー期(1815-1848)の光景として、金持ちが邸宅の前の道で屠殺を行い、「近所の人々が集まってお祭り騒ぎ」⁷⁰⁾になったりしたことが報告されている。また、屠殺のモチーフを含むフランス語圏類話のなかには、このほかにも、英語圏類話には見られない農村共同体での日頃の光景が織り込まれている。

登場する家畜たちが、飼い主たちの名前では呼ばれているのも(v.8)、雑談するおかみさんたちの近くで、つながれることなく、草を食んでいるのも(v.35)⁷¹⁾、これは、日頃から、共同で使用できる休閑地を利用して、農耕とともに放牧が行われていたことを物語る光景である。

また、動物たちが情報を得るのは、上水道がまだ整っていなかった時代、おかみさんたちが一緒に洗濯をしながらのおしゃべりからである(v.8,23,35)⁷²⁾。野外の共同洗濯場となった池や沼は、今日、「釣り場」の意味しかない「水場」^{みずば}(pêcherie)^{画像4)}の語で呼ばれた。文化人類学者ジェネップは、洗濯にまつわる迷信、たとえば、「土曜に洗濯をすると、亭主の寿命が縮む」、あるいは「降誕祭の行われる週に洗濯をすると、一家のあるじの柩を出すことになる」⁷³⁾などを紹介している。今日のように個人が自宅で行う洗濯形態ではなく、共同で家事を行う場からこそ、このような迷信が生まれやすいものであろう。

共同体単位の作業によってこそ、自然環境に対応できたこともある。たとえば、ハリエニシダの繁茂の問題である。ハリエニシダは、一定期間、繁茂するままに放置されても、再び、耕作地を確保するため、定期的に伐採しなければならぬ。フランスなら、ブルターニュ地方によく見られるが、共同で伐採を行うものらしい。根が深いため、手作業となり、ちょうど、収穫時のように編隊を組んで取りかかるのが、一種の「定期的な行事(cérémonies périodiques)」⁷⁴⁾として見られたとジェネップは述べている。これも、共同体の崩壊したなかでは、行えないことであろう。ハリウエルでは、子豚の出会った男は、ひとりでハリエニシダをかかえていたのであった。

このように、地方に残るかつての生活は、ハリウエルの時代にして、すでに、イギリスにおいては、あまりにも遠くなってしまったのであろう。しかし、ハリウエルは、かわりに、このような農村共同体の崩壊した後のイギリスの社会状況に焦点をあて、この状況がもっとも凝縮したかたちであらわれた子供たちを描こうとしたのではないだろうか。

c. 「こども」を描いた 19 世紀文学：「悲惨さ」

18 世紀の末ともなると、「産業 (industry) という単語は、工場を連想させる」⁷⁵⁾ものとなっていた。しかも、工場労働者には、多くの女性や子どもが含まれ、とくに、多くの貧困層の子供たちが重要な労働源となった。ハリウエルにおいて、困窮により家を離れざるをえなかった子豚たちが、どこからどこへ向かったのか、いつの季節かも語られないまま、ただ、ハリエニシダの生えた風の吹く荒地にただいることだけが、漠然と示されているのは、ハリウエルの時代に、こどもたちの置かれていた厳しい状況だとも理解されるのである。

この点、英語圏類話では、ピクシー版以外、すべてに煙突のモチーフが認められることが注目される。黒人伝承では、煙突から侵入したキツネは、いぶり殺されるし、ラング版とハリウエル版では、煙突からの侵入後、準備されていた沸騰した湯に落ちてしまう。もっとも、クンダル版では、煙突の策略は、3 番目ではなく、2 番目のガチョウを襲うキツネのたくらみとして成功する。藁の屋根に火を放ち、中にいるガチョウが、火にいたたまれず、煙突を通して上へ飛ばざるをえなくなるよう仕向け、出てきたガチョウが下に降り立つやキツネはたいらげてしまうのである。

オオカミによる煙突からの侵入のモチーフは、ドラリュも物語要素 <II.B (2) 11.> として挙げており、フランス語圏類話についても、5 話⁷⁶⁾に認められる。しかし、これがハリウエルの影響によるものと思わせるほど、フランス語圏類話では、最終決戦を長引かせ、しかも、かならずしも死の結末に至らないバリエーションが特徴であると見られる。オオカミを家に入れてやり、さらには、櫃に誘導して熱湯を注ぎ殺してしまうという結末に至るのが 11 話⁷⁷⁾あるが、その過程でも、あたかも、オオカミあるいはキツネと家畜との本来、弱肉強食の間柄の者どうしが、そのような差し迫った状況にいないかのように、一緒にいる時間を長引かせて楽しんでいるかのように駆け引きがくりひろげられるのである。さらには、「オオカミと 7 匹のコヤギ」(AT123) や「プレーメンの音楽隊」(AT130) との話型の混交が見られ (v.50,35)、このことにも、フランスにおけるこの話型の口承の歴史の古さが見てとれるのである。

一方、英語圏類話における煙突は、近しい現実の反映であり、とりわけ過酷ながら、煙突掃除が子供の仕事となったイギリス近代初頭の社会背景と無関係ではないだろう。イギリスでは、16 世紀から 17 世紀にかけてのジェームズ 1 世 (1566-1625) の治世に、煙突の煤払いの仕事に子どもの需要が高まったのである。当時の、ロンドンに見られた何階もの高い家屋の建築様式は、細い曲がりくねった煙道パイプ (flue) を取り付けたもので、それを大人が煤払いすることが不可能となったのである。そして、燃料が薪にかわり石炭となると、煙道は通風のために狭くなり、19 世紀はじめに作られた煙突には、もはや、幼児しか通ることができないものが珍しくなかったという⁷⁸⁾。

ウィリアム・ブレイクが 1789 年、1794 年出版の両詩集で、それぞれに発表した「煙突掃除の少年」("The Chimney-Sweeper")⁷⁹⁾には、貧しい家の幼い男の子がまだ十分しゃべれないの

に、煙突小僧として売られて働く姿が、煤けた亡骸を暗示するかのよう、「黒いもの」(a little black thing)と唄われている。このような詩の誕生は、当時、社会問題となっていた煙突小僧たちの実態調査が始まり、境遇改善のための条例の制定(1788)に至ったことが、その背景にあるだろう。

また、すでに取りあげたが、ハリウェルとほぼ同時代人であるチャールズ・ディケンズの『オリバー・ツイスト』(*Oliver Twist*, 1837-39)を読めば、煙突掃除に駆り出されるのは、子供でも、とりわけ、救貧院で暮らす貧困層であった事情が読み取れる。生まれてすぐ孤児となり救貧院で育ったオリバーが、9才のある日、空腹にたえられず、おかゆをもっと欲しいと言ったことから独房行きとなり、さらには、徒弟にしようとやってきた煙突の煤払いの親方に引き渡されようとする。これを決定する交渉の場で、奨励金を値切ろうと、一人の委員から、小さな子供が煙突のなかで窒息して死んだという話が出たのにたいして、親方は、煙突の途中でつかかった坊主を煙突から下ろすには、がらがん火を燃やせば、足を焼かれるので、身をもがいて逃げ出すなどと応じるのである。これは、先ほど触れたクンドル版(1856)でのキツネの残酷な策略を思い出させないだろうか。18世紀末から19世紀にかけて、煙突掃除の仕事の就労年齢の下限を引き上げ、煙突小僧の境遇の改善と仕事の安全を担保するための条例がつくられたのだが、それでも、1840年から第4回目の「煙突掃除対策条例」が制定された1864年までに、事故死した煙突小僧が少なくとも23人はいたという⁸⁰⁾。ハリウェルをはじめ、英語圏類話で、煙突からの侵入が決定的に死に結びついているのも、このような現実を暗示していると受けとめられるだろう。

『オリバー・ツイスト』は、子供の、とりわけ孤児の置かれた状況を描くプロパガンダの小説として成功し、改善を求める動きを社会に引きおこしたが⁸¹⁾、さらに、オリバーの過ごした救貧院が、社会的にどのような存在であったかを、ディケンズは『クリスマス・キャロル』(1843)で痛烈に語っている。

「かれら(=子供たち)に、逃れるところなり、頼みの綱とかはないのかね？」とスクルージは叫んだ。すると、「監獄(prisons)はないのかね？」と、幽霊は彼のほうを振り向いて、彼自身が言った言葉をもちだしたのだ。「救貧院(workhouses)はないのかね、だろ？」⁸²⁾

『クリスマス・キャロル』第3節 第2の幽霊

スクルージは、第2の幽霊との旅の最後に、幽霊が衣の襷から取り出して彼に見せたひどく惨めな二人の子供について、彼らを救済することはできないのかと幽霊に問うたところ、幽霊はまたもや、上に引用のように、スクルージ自身が言った言葉を持ち出す。それは、以下に引用のように、クリスマス前夜、紳士たちがスクルージのもとにクリスマスのチャリティを求めてやって来たとき、これを断るべく彼が言った言葉であった。

「監獄 (prisons) はないんですか？」とスクルージがたずねた。

「監獄はたくさんあります」とペンを置きながら、紳士が言った。

「それに救貧院 (the Union workhouses) は？」とスクルージがたずねた。「今でもやっているんですか？」

「やっています、今でも」と紳士は答えた。「もうやっていると答えられたらいいんですがね」

「それでは、足踏み車も救貧法も (the Treadmill and the Poor Law) 大活躍なんですか？」とスクルージが言った。

「両方とも盛んです」⁸³⁾

『クリスマス・キャロル』第1節 マーレイの亡霊

引用中、「足踏み車」(treadmill)⁸⁴⁾は、苦役のために開発された道具で、したがって監獄のことであり、「救貧法」(Poor Law)は、この立法のもと運営されている救貧院をさしている。つまり、上に引用の場面で、比喩的にも繰り返された監獄と救貧院の二つの施設が、後に第2の幽霊との旅においても、幽霊によって、スクルージの言葉をリプレーするかたちで繰り返され、この彼の言葉がいかに無慈悲であるかを示すと同時に、彼にとってだけでなく、世間でも、この二つの施設が等価なものとなるほど、救済という社会的機能を果たしていない救貧院の現実を告発しているのである。

イギリスでは、16世紀から、公的福祉の根底となるべく、「(旧)救貧法」と呼ばれる一連の貧困者対策法案が制定されてきたのだが、19世紀はじめに、「人口過密」,「貧民街 (slum)」の用語が生まれ⁸⁵⁾,その現実についての認識が高まるなか、1834年に新救貧法 (New Poor Law) が導入された。これはすでにスクルージの言葉にその反映を指摘したマルサス理論の普及によって、救済施設の外で、貧困者に「援助を与えたり、むやみに施しを与えたりすることは、人口統計および人間社会の諸問題を増やす」⁸⁶⁾という考え方が示されたものであった。したがって、統制のきびしい救貧院内で、付設された作業場で、働く義務を教えるべく労働が強制されるのも、あるいは、監獄で、市民権を奪われ、人間矯正の名目で強制労働が課されるのも、あまり変わりがないものと人々が受け取るのも無理のないことであった。

このような貧困問題をかかえた社会のひずみが、その境遇となって、もっとも顕著に表れるのが子供であることを、ディケンズは、『デイヴィッド・コパフィールド』(David Copperfield, 1849-1850)でも、母の再婚そして母の死とともに、追いやられていた寄宿学校もやめさせられ、働きにだされる不遇な少年を通して描いた。幼くてして工場で働いたディケンズの自伝的色合いの強いこの傑作も、やはり、人気を博した。農業革命、そして産業革命の進行する社会が、不遇というより悲惨な境遇の子供たちを生み出したことは、このように、ハリウエルだけでなく、19世紀のイギリス文学がとくに描いたところであった。

一方、フランスにおいても、同じ頃、ヴィクトル・ユゴーの代表作『レ・ミゼラブル (悲惨

なる人々』(*Les Misérables*, 1862) が人気を博していた。ユゴーがフランスから追放されていた時期(1851-1870)の作品である。彼を世界に知らしめたこの代表作の主人公は、くしくも、ユゴーがフランスから追放されていたのと同じ19年の刑を終えて出てきたジャン・ヴァルジャンである。しかし、彼以上に、読者の心を打ったのは、母親ファンチヌにあずけられた先の安料理屋でこき使われたすえに孤児となってしまった少女コゼットであった。エミール・バイヤールのイラスト「掃除するコゼット」("Cosette balyant")^{画像5)}の与えた強烈な印象とあいまって、この作品のみならず、この時代のアイコンとなった。このことは、ジャン・ヴァルジャンを中心として、「悲惨なる人々」を時代の群像として描こうとしたユゴーの意図とは違ったところに、人々の関心が強かったことをあらわしていないだろうか。同じ世紀のイギリス文学がテーマの中心に据えようとした子供の不遇に、やはり、心を打たれたのだと考えられるだろう。

ユゴーは、『レ・ミゼラブル』において、みずからの政治的立場を表明するかのよう、1832年の共和派によるパリでの王政復古打倒のための蜂起を描いている。この点については、庶民階級全般ではなく、資産をもたないプロレタリアのみしかとらえておらず、社会を図式化してしまっているなどの弱点の指摘がありながらも、この小説が広く人気を博したことについて、ユゴーが序文で行った「告発」に注目し、これが「叙事詩」(épopée)たるこの作品のテーマだとする見方もある⁸⁷⁾。以下にユゴーによる序文を引用しておく。

〔前略〕現世紀の三つの問題、プロレタリアであることゆえの男の落伍、飢えのために女が貶められること、そして、暗黒のための子供の衰弱、これらが解決されない限り、〔中略〕地上に「無知」(ignorance)と「悲惨さ」(misère)がある限り、本書のような類いの本も無駄ではあるまい。 V. Hugo, *Les Misérables*, Pocket, 2013.

ユゴーが「三つの問題」として挙げるのが、述べられた順に、ジャン・ヴァルジャン、コゼットの母ファンチヌ、そしてコゼットの境遇を指していることは明かである。彼らの置かれた状況を「悲惨さ」と表現しているユゴーは、国会議員在任中であった1849年、国会において、「悲惨さを根絶すること」("Détruire la misère")⁸⁸⁾と題して演説を行っている。「この世の苦しみ(souffrance)をなくせるなどとは思っていない。苦しみ、それは、神の定めである。しかし、悲惨さ(misère)を根絶することはできると考えている。」「今、このパリの通りや家や掃き溜のような場所で、男も女も若い娘も子供も、家族全員が、ベッドも毛布もないままに、ひしめき合って暮らしているのだ」と訴えたのである。

ユゴーが、演説において、現実の「悲惨」について、社会は知るべきだと訴えているのは、『レ・ミゼラブル』の「序文」において、「無知」と「悲惨さ」を結び付けて説いていることを説明するものであろう。また、これは、ディケンズが『クリスマス・キャロル』で、述べていることと同じではないだろうか。

「かれらは人間の子だ」と、幽霊が二人を見下ろしながら言った。「ふたりとも、自分たちの父親を訴えて、わたしにしがみついているのだ。こちらの男の子が『無知』（Ignorance）で、こちらの女の子が『困窮』（Want）だ。両者に、そして、その系譜の者たちに用心するのだ。とくに、この男の子に用心するのだ。というのも、もし書かれたのが消えていないなら、彼の額に『破滅』（Doom）とあるだろう。認めないのかね！」と、幽霊は片手を町のほうに伸ばしながら叫んだ。⁸⁹⁾ 『クリスマス・キャロル』第3節 第2の幽霊

ディケンズも、人間の「無知」と「困窮」を対にとらえている。幽霊が手を伸ばした先にある町は、破滅の町バビロンを暗示し、現実の悲惨な状況に「無知」のままでいる人間には「破滅」が待っていることをスクールジに説いているのである。

「悲惨」への言及に関連して、すでに一部をとりあげたが、ハリウエルが『イングランドの伝承童謡』の第5版（1853）に付した「第5版への序文」において、子供たちの陥っている状況について、同じことを述べていることに注目したい。

子供たちのためにここに唄を集めたことは無駄ではなかったと思うので、子供たちがどう判断するか委ねたいと思う。イングランドの津々浦々から摘み取ってきたものが幼年期の不幸な経験というべき何時間にも及ぶ惨めさ（misery）をなだめることのできる美しい花となってくれるだろう。⁹⁰⁾ ハリウエル『イングランドの伝承童謡』「第5版への序文」

上の引用部のすぐ前段にあたる部分では、子供たちのもてる想像力にふさわしい伝承童謡の魅力を語っていたハリウエルだが⁹¹⁾、これにすぐ続けての締めくくりとして、「悲惨」（misery）の語を突如として持ち出している。彼が、なぜ、最初にして最後となる序文を第5版に添えることを思い立ったかについては、ハリウエルが『イングランドの伝承童謡』を出版した経緯（すでに説明したように私家版であった）からすれば、初版をだしたパーシー協会が、第5版を出す前年に瓦解している⁹²⁾ ことから、初版を出したときの想いを書き留めておきたいということではないだろうか。それにしても、今日、子供向けの本の序文に、子供たちの悲惨さをやわらげてくれることを願うなどと書くだろうか。

序文の最後の句、「何時間にも及ぶ惨めさ」については、かつての工業化以前の徒弟制度、手工業、家内工業では、労働時間は職人たちによる自律的管理に任されていたのにならして、工場労働者は工場主の定める生産性重視のきびしい規律に従うことになった労働環境のなかに、19世紀のイギリスの幼い子供たちがいたことを考えあわせなければならないだろう。もともと、イギリスでは、1850年から1860年代になって、階級間の調和をはかるという新しい考えから、労働環境に変革の兆しが見られた。イギリスではそれまであまり使われていなかった「国家（state）」⁹³⁾ という語が用いられるようになり、産業革命による悪弊を正すために国家が介入す

るようになったのである。かくして、ハリウエルが第4版を出した翌年、1847年には、議会は、紡績工場における女性と子供の労働時間を制限する「10時間労働法」⁹⁴⁾を通過させたのである。それでも、子供に、日に10時間は重労働であることを、ハリウエルは示唆しているのではないだろうか。

19世紀という時代のキーワードは「悲惨さ」(misère/misery)であったと言えるだろう。すでに、農村共同体が破綻し、離農したものが産業革命のもとの労働力となった新しい産業形態、新しい労働形態のもとのひずみが、子供たちにのしかかった時代であった。

5. おわりに

ハリウエルの「三匹の子豚」が、謎に満ちた童話であることは、あまり、気づかれてこなかったのではないだろうか。耳慣れないハリエニシダというシダの植物に、昔話には珍しいカブラ、そして、バター攪拌器などという道具がなぜ登場するのか。なによりも、数ある類話のなかでハリウエルだけが、なぜ、子豚たちが困窮のために家を出たと語っているのか。これらが語りかけているはずのものは、彼の「三匹の子豚」が子供向けの伝承童話と分類され、絵本童話として、繰り返し書き換えられていった過程で、忘れ去られていったように思われる。

しかし、これらの謎は、絵本ではなく、口承版として残された、あるいは作家によって再話された、この話の属する話型、AT124話型のフランス語圏と英語圏の類話を比較対照しながら読解することで、はじめて解明に近づけたと思う。あるいは、いわば、ハリウエル版を手がかりに、英仏文化圏の類話について、口承話の構成を促しているのが、教訓性の追求なのか、ロジックの追求なのかをあぶりだすことで、類話を比較文化的に読解することもできたと言えるだろう。

フランス人にとっては、庶民の野菜でしかないカブラは、イギリスの文化の源流、ケルト文化に根ざすハロウィーンの祭を指し示し、イギリス農業革命のシンボルでもあった。また、ハリウエルの物語において、「家」や「森」など何ひとつ場を表す言葉がなく、ただ、ハリエニシダだけが見い出される風の吹く荒れ地が、おそらくは3匹の子豚たちがそろって家を建てるべくたどり着いた場所であったのにたいして、物語の後半では、家を持ちこたえた子豚が、オオカミからうまく逃れて収穫をなしとげ、道具を買い、自由に歩き回る生活に転じたかのような物語の鮮やかな転換を見せた。これは、ハリウエルと同時代のイギリスの小説において、ハリエニシダを通して示唆されていた「死と再生」としてとらえてもよいものに思われたのである。

そして、AT124話型の口承版が育った地であり、その意味で、ハリウエルの物語の母胎となったとも言えるフランスと、この話型の伝承について最初の再話を行ったハリウエルの育ったイギリスの、双方の国の作家たちが、ハリウエルの時代に提示した同じ言葉が目されたのである。ユゴーが『レ・ミゼラブル』(1862)の序文で、ハリウエルが自分の童話集「第5版へ

の序文」（1853）で、ディケンズが『クリスマス・キャロル』（1843）で幽霊の言葉として、19世紀の子どもたちを憂えていたのである。すなわち、「悲惨さ」（*misère/misery*）である。これは、「三匹の子豚」を理解するための言葉でもある。

註

本稿において拙論（その1）とあるのは、『京都産業大学論集』人文科学系列第19号所収の拙論（pp.415-441.）をさし、本稿は（その1）での論旨、用語、出典を踏襲している。なお、記載のないものは拙訳である。

- 1) Henri Pourrat, "Le conte de la truie bien avisée", dans *Le Trésor des Contes* (『お話の宝物』), Tome 2, Omnibus, 2009, p.1236.
- 2) cf. Paul Delarue, *Le Conte populaire français*, Tome 1, p.382.
- 3) Version du Velay: "La fille et le loup" cité dans "Le Petit Chaperon Rouge" dans la tradition orale par Yvonne Verdier, *le débat*, juillet-août 1980, numéro 3, p. 58.
- 4) cf. Bernadette Bricout, «L'Aiguille et l'Épingle », dans *'La Bibliothèque Bleue' nel seicento o della letteratura per il popolo*, Nizet, 1981, p.51.
- 5) 『お話の宝物』の2巻本の出版にあたって、序文を担当したブリクーは、アンリ・プーラ・センターに保存されている資料を調査のうえ、プーラの再話は確かなソースに基づいており、正当に評価されるべきだと述べている。cf. Bernadette Bricout, "Introduction" pour *Le Trésor des contes*, Tome 1, par Henri Pourrat, Omnibus, 2009, p. viii.
- 6) cf. *Motif-Index of Folk-Literature*, revised and enlarged edition by Stith Thompson, 7 volumes, Indiana University Press. 伝承の物語の構成要素であるモチーフを、物語における役割に応じて記号分類したカタログ。当該のモチーフを含む話型番号も適宜、記載されている。
- 7) cf. <http://onlinebooks.library.upenn.edu/webbin/book/lookupname?key=Halliwell%2dPhillipps%2c%20J%2e%20%2e%20%28James%20Orchard%29%2c%201820%2d1889> (The Online Books Page by J.O.Halliwell-Phillipps)
- 8) 定松正他『英米児童文学辞典』研究社、2001年、160ページ。〈Halliwell〉の項目参照。
- 9) cf. Vivian Thomas and Nicki Faircloth, *Shakespeare's Plants and Gardens, A Dictionary*, Bloomsbury Arden Shakespeare, 2014, p.143.
- 10) *The Complete Works of William Shakespeare*, Gramercy Books, 1990, p.2.
シェイクスピア『テンベスト』松岡和子訳、ちくま文庫、14ページ。
- 11) *The Complete Works of William Shakespeare*, p.17.
- 12) Charles Dickens, *A Christmas Carol*, Wisehouse Classics, 2015, p.40.
- 13) エイザ・ブリッグズ『イングランド社会史』今井宏他訳、筑摩書房、2004年、378ページ。
- 14) The Project Gutenberg EBook of *Adam Bede*, by George Eliot [EBook #507]
<http://www.gutenberg.org/files/507/507-h/507-h.htm#link2HCH0037>
- 15) George Eliot, *Silas Marner*, chapter 12, Penguin Classics, 1996, p. 108.
- 16) Ibid., chapter 16, p.147.
- 17) Michael Allaby 編『オックスフォード植物学辞典』（*Oxford Dictionary of Plant Sciences*）駒嶺穆監訳、朝倉書店、75&246ページ参照。
- 18) *Motif-Index of Folk-Literature*, vol.6.2, Index, p.820. 〈turnip〉の項参照。
- 19) *Kinder-und-Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*, zweiter Band, Insel Taschenbuch, 1984, p.21.
- 20) Jean-Luc Henning, *Dictionnaire littéraire et érotique des fruits et légumes*, Albin Michel, 1994, p.298.

- 21) 該当の13話は、v.4 (ナシ), v.5 (クルミ), v.6, v.7 (カブラ, ナシ), v.9 (サクランボ, ナシ), v.10 ("pot de miel": ハチミツ), v.19, v.20 (ナシ), v.23 (リンゴ, ブドウ), v.26 (ジャガイモ, リンゴ), v.29, v.34 ("pommier et vigne": リンゴとブドウ), v.51 (リンゴとクルミ)。
- 22) (v.7) M^{me} Gautier-Echard et M^{lle} Lafond, "le loup et la truie" dans *Contes de Grand'Mère*, Librairie Fernand Nathan, 1935, p.6.
- 23) Colette Guillemand, *Les mots de la cuisine et de la table*, Belin, 1990, p.277. <navarin> の項。
- 24) 2005年7月6日にロシアのカリーニングラードで開催予定の主要国首脳会談に先立って、当時のロシアのプーチン大統領が、EU欧州連合の代表として、フランスのシラク大統領とドイツのシュレーダー首相を招いて会談した際のシラク大統領の発言を指している。これを、7月4日付けで報じたフランスのリベラシオン紙は、これに対するイギリスのメディアの反撃も、7月6日付けで紹介している。
- 25) cf. Bruno Laurioux, *Manger au Moyen Âge*, Hachette Littérature, 2002, pp.159-161. "manger comme une rustre" (「田舎者のように食べる」) の章を参照。
- 26) 『レ・ノヴェツェル』(Gentile Sermini, *Le Nouvelle*) の第25話にあたる物語の概要については、米山喜晟他『イタリア・ノヴェツェラの森』佐井寺三角社, 1993年, 289ページ参照。
- 27) Laurioux, p.160.
- 28) Dictionnaire Universel d'Antoine Furetière, SNL-Le Robert, Tome 3, 1978. <rave> の項。
- 29) リヴァロルの *Lettre critique sur le poème des Jardins suivi du Chou et du Navet* (1782) 所収の詩。*Dictionnaire des Citations françaises*, publié sous la direction de Pierre Oster, les usuels du Robert, 1978, p.668 (n° 7473). 諸謙的な予言の体裁をとった、リヴァロルらしい批評のフレーズである。
- 30) cf. *Le nouveau Petit Robert*, nouvelle édition du *Petit Robert* de Paul Robert, Dictionnaires Le Robert, 1993. <navet> の項。
- 31) François Caradec, *Dictionnaire du français argotique et populaire*, Larousse, 1977, p.170.
- 32) ジャン・マルカル『ケルト文化事典』金光仁三郎他訳, 大修館書店, 1999年, 79ページ。
- 33) 同上。
- 34) 同上。
- 35) 該当の14話は、v.4 (baquet: 桶), v.9 (marmite: 深鍋), v.17, v.19, v.20 (pot: 壺), v.22, v.23 (ponne: 大きい桶), v.29, v.31, v.33, v.34, v.42 (ナイフ, 刃先, ガラス破片), v.50 (chaudron: 鍋), v.51 (chaudron: 鍋)。(v.42) は、家の防備補強のための買い物。
- 36) 『ハロウィーンの文化誌』, 81ページ参照。
- 37) シャンクリンの町の公式ホームページ。
<http://www.visitshanklin.co.uk/attractions/heritage-and-history>
- 38) キーツ『詩人の手紙』田村英之助訳, 富山房百科文庫, 2004年, 244ページ参照。
- 39) cf. Charles Dickens, *Our Mutual Friend*, Penguin Classics, 1997, p.125.
- 40) 『ハロウィーンの文化誌』, 84ページ参照。
- 41) 同上書, 90ページ参照。
- 42) 同上。
- 43) 同上書, 81ページ参照。
- 44) 同上書, 90ページ参照。
- 45) Jeremiah Witting, *The legend of Stingy Jack*, GmbH, Leipzig, 2014. (no pagination)
- 46) A.L.Douzet, *La Fabuleuse Histoire de Jack' O Lantern*, Magic Tales, 2013, p.91.
- 47) cf. *Motif-Index of Folk-Literature*, vol. 1, p.344.
- 48) 『ハロウィーンの文化誌』, 90ページ参照。
- 49) 『ケルト文化事典』, 4ページ参照。
- 50) James Orchard Halliwell, p.17.

- 51) 『ハロウィーンの文化誌』, 46-47 ページ参照。
- 52) (v.1,5,8,9,10,11,12,13,14,17,23,29,31,32,33,34,35,41,42,43,45,48,50,51) の 24 話が該当。
- 53) *Le nouveau Petit Robert* の <turnip> の項参照。
- 54) Bill Price, *Fifty Foods that Changed the Course of History*, Apple Press, 2014.
- 55) 総合地球学研究所編『地球環境学事典』弘文堂, 2010年, 454 ページ参照。
- 56) Bill Price, p. 102.
- 57) 『地球環境学事典』, 454 ページ参照。
- 58) Bill Price, p.104.
- 59) 川北稔『イギリス近代史講義』講談社現代新書, 2010年, 35-36 ページ参照。
- 60) cf. Susanna Wade Martins, "Turnip" *Townshend, Statesman & Farmer*, Poppyland Publishing, 1990, p.80. cf. Price, pp.104-105.
- 61) 『アレグザンダー・ポープの詩的著作』所収の諷刺詩 (satires 317) に, "All Townshend's turnips, and all Grosvenor's mines," とある。ポープは, 農業革命のシンボルのカブラと産業革命のそれである炭鉱(石炭)を並べて表現している。cf. "The Second Epistle of the Second Book of Horace"(1737), IN *The Poetical Works of Alexander Pope with memoir, explanatory notes etc.* by Jstew York, A. L. Bukt, Publisher.
cf. http://archive.org/stream/popepoetical00poperich/popepoetical00poperich_djvu.txt
- 62) 『イギリス民話集』河野一郎編訳、岩波文庫、1977年、120 ページ。
- 63) 拙論(その1)のガルドンについての註¹⁹⁾参照。
- 64) 『イングランド社会史』、274 ページ。
- 65) モリー・ハリスン『こどもの歴史』藤森和子訳、法政大学出版局、375 ページ参照。
- 66) 井野瀬久美恵編『イギリス文化史』、昭和堂、2014年、113-132 ページ。小野塚知二氏執筆の第6章「イギリス料理はなぜまずいか?」を参照。
- 67) cf. Jean Anth elme Brillat-Savarin, *Physiologie du Go t ou M ditations de Gastronomie Transcendante*, Elibron Classics, 2005, pp.86-89.
- 68) James Orchard Halliwell, p.31.
- 69) Charles Perrault, *Contes*, Classiques Garnier, 1967, p.104.
- 70) 前川道介『楽しいピーターマイヤー』国書刊行会、1993年、39 ページ。
- 71) (v.35) Paul Duchon, "La maison des loups" dans *Contes populaires du bourbonnais*, Moulins, Cr pin-Leblond, 1945, p.15.
- 72) (v.23) L on Pineau, "Le conte de la treue (truie)" dans *Contes Populaires du Poitou*,  d. des R gionalismes, 2014, p.107.
- 73) Arnold Van Gennep, *Le Folklore Fran ais*, Tome 1, Robert Laffont, 1998, p.1130.
- 74) Ibid., Tome 2, p. 2207.
- 75) 『イングランド社会史』, 275 ページ。
- 76) 煙突からの侵入にあたる物語要素 <IIB (2) 11.> に該当するのは, 5 話 (v.1,2,16,25,27)。
- 77) 櫃に誘導して熱湯を注いで殺すのは, (v. 5,8,11,12,14,15,23,32,34,45,51) の 11 話。
- 78) 松村昌家『19世紀ロンドン生活の光と影』世界思想社、2003年、217-218 ページ参照。
- 79) 『無心の歌』(*Songs of Innocence*, 1789) 所収「煙突掃除の少年」
母が死んだとき、わたしはまだ幼かったが
父は私を売った。わたしの舌はようやくと
「煤掃除!煤掃除!」と言えたくらいなのに〔以下略〕
ウィリアム・ブレイク『ブレイク詩集』寿岳文章訳、岩波文庫、24 ページ。

"THE CHIMNEY-SWEEPER"

『有心の歌』(*Songs of Experience*, 1794) 所収「煙突掃除の少年」 <http://www.gutenberg.org/files/1934/1934-h/1934-h.htm#page45>

A little black thing among the snow,

Crying! 'weep! weep!' in notes of woe! [...]

They clothed me in the clothes of death,

And taught me to sing the notes of woe. [...]

「煤掃除! 煤掃除!」といじらしい声ふりしぼり

雪の中を歩く 小さな黒いものよ [中略]

父母は ぼくに死の衣を被せ

あの悲しい呼び声を流すよう仕込んだ [以下略]

- 80) 『19世紀ロンドン生活の光と影』, 222 ページ参照。
- 81) 斎藤美洲編著『イギリス文学史序説』中教出版, 平成元年, 327 ページ参照。
- 82) Charles Dickens, *A Christmas Carol*, p. 45.
- 83) Ibid., p.10.
- 84) 〈treadwheel〉が一般的呼称。ウィリアム・キュービットの発明にジョン・オーリッジが工夫を加え、何人もが並んで同時に踏み続けるタイプが開発され、1819年にイギリスの監獄に導入が開始された。cf. Neil R. Storey, *Prisons & Prisoners in Victorian Britain*, The History Press, 2014, p.71.
- 85) 『イングランド社会史』, 384 ページ。
- 86) 同上書, 387 ページ。
- 87) cf. *Dictionnaire des Grandes Œuvres de la Littérature Française*, sous la direction de Henri Mitterand, Le Robert, 1992, pp.419-420. 『レ・ミゼラブル』の序文の一部をそのまま作品のテーマとして引用して、作品解説を締めくくっている。
- 88) 1849年7月9日の国会議員としての演説。ユゴーは1840年頃から政治活動に関心を深め、多くの文豪者とともに、1848年の2月革命に参加し、ルイ＝フィリップ王政を倒し、第2共和制のもと、1848年、国会議員に選出される。1851年より国外亡命となるが、1871年のフランスへの帰国後、再び、短期間、国会議員をつとめている。フランス国会の公式HPを参照。<http://www2.assemblee-nationale.fr/decouvrir-l-assemblee/histoire/grands-moments-d-eloquence/victor-hugo-detruire-la-misere-9-juillet-1849#menuinter>
- 89) Charles Dickens, *A Christmas Carol*, p.45.
拙訳は以下を参照。『クリスマス・キャロル』村岡花子訳, 新潮文庫, 132 ページ参照。cf. Ch. Dickens, *A Christmas Carol, english-français bilingual edition* (英仏対訳版), translated by M^{lle} de Saint-Romain and André de Goy, under the supervision of Paul Lorain in 1890, Witron Arvel, 2015, p.91.
- 90) Halliwell, p.vii.
- 91) 拙論 (その1), 429 ページ参照。
- 92) cf. William Thomas Lowndes, *The Bibliographer's Manual of English Literature*, H.G. Bohn, 1857-64, Appendix, p.93.
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015067268170;view=1up;seq=93>
- 93) 『イングランド社会史』, 318 ページ。
- 94) 同上。



画像1 https://en.wikipedia.org/wiki/File:Leeds_butter_churn.jpg バター攪拌器（攪乳器）
 画像2 <https://en.wikipedia.org/wiki/Shanklin> ワイト島のシャンクリン（島の南南東の町）
 画像3 <http://www.dartmoor.gov.uk/index> ダートモア
 画像4 <pêcherie> の語は（v.8）に認められる。画像は、フォンテーヌ・フルシュの「水場」。野外のほか、屋内共同洗濯場（lavoir）もあった。
<http://fontaine-fourches.com/632.3.La.lessive.3.0.Les.lavoirs.les.laveuses.et.les.lavandieres.html>
 画像5 <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ebcosette.jpg?uselang=fr> エミール・バイヤールが、『レ・ミゼラブル』初版（Lacroix）のために素描したコゼット像。今日でも、表紙をこのイラストで飾り、『コゼット 不幸な子供時代』と題した、青少年向けにリライトされたものすら出版されている。cf. *Colette, une enfance malheureuse- Les misérables*, Carrés Classiques, Nathan, 2014.

A Cultural Reading of Halliwell's "The Story of the Three Little Pigs" (AT124) and its French and English variants (part 2)

Keiko TOKURA

Abstract

(part 2)

3. Several details such as <turnip>, <apple> and <butter-churn> seen in Halliwell's version refer to the "Halloween culture" which was to fade out in England in his time.

4. To the French people, the "turnip" is just a typical vegetable for the lower class. In England, the turnip was the symbol of the social change, due to the agricultural and industrial revolution.

5. The "furze" used as the material to build the second pig's house should be regarded as the only factor that reveals in what kind of environment this pig is to live. This type of metaphor using the motif of the "furze" is what is often seen in the 19th century English literature. The key word for the 19th literature such as Hugo and Dickens's which describes the adversity of the children, is <misery>, and this key word may be applied to the comprehension of "The Story of the Three Little Pigs" as well.

Keywords: furze, turnip, apple, butter-churn, misery